

シリーズ「グローバルジャスティス」第11回

日朝関係から考える東北アジアの平和

石坂浩一（立教大学異文化コミュニケーション学部准教授）

---

2011年5月12日、同志社大学博遠館212番教室において、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科が主催（同志社コリア研究センター共催）する連続セミナー・シリーズ「グローバル・ジャスティス」が開かれた。第11回目を迎えた今回は、石坂浩一氏（立教大学異文化コミュニケーション学部・准教授）をお招きし、「日朝関係から考える東北アジアの平和」をテーマに講演が行われた。以下は、講演の内容をまとめたものである。

講演の冒頭では、朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）に関する映画作品が紹介された。具体的には、在日朝鮮人監督によってつくられた『愛しきソナ』（梁英姫監督）、中国朝鮮族の監督による『豆満江』（チャン・リュル監督）、韓国人監督による脱北者をテーマにした『茂山日記』（パク・チョンボム監督）、韓国の国家人権委員会が製作した『視線のかなた』の四作品である。これらは朝鮮に対する認識を問い直し、「遠い国」とされている朝鮮を「隣人」として理解しようとする作品である。このような努力が、在日朝鮮人、中国朝鮮族、脱北者（の視点から描いたか韓国人監督）、韓国人などによってなされているが、一方で日本はどうだろうか。

このような問いを出発点として、日朝関係についての分析が行われた。主な内容をまとめると、以下の通りである。第一に、東日本大震災に関わる問題である。震災を受けて、韓国の各界からは史上最高額といわれる募金が送られてきており、日本社会も高い関心を示した。一方、朝鮮からも赤十字を通じて支援金が送られてきたが、日本社会はほとんど関心を示さず、むしろ政府レベルでは対朝鮮制裁の延長を決めるという有様だった。また、原発事故によって、日本は「放射能汚染の発生源」となり、東北アジアだけでなく、世界中に被害をもたらす結果をもたらした。

第二に、朝鮮をめぐる情勢分析である。米朝の間では、南北会談→米朝協議→六者協議という段階で協議を進めるという「三段階案」が合意されていた。だが、韓国側は、哨戒艦沈没事件や延坪島砲撃事件の解決を前提としない同案について消極的な態度を示している。最初の段階である南北会談について、南北の間では繰り返し秘密接触が行われており、カーター元米大統領を通じて南北首脳会談が朝鮮側から提起されたが、どこまで現実的な話かは不透明である。

また、朝鮮の後継体制については、金正恩氏に世代交代するという説が日本では主流だが、実際にはそこまで進んではない。金正日委員長重病説の後、しばらくして金正日氏の健在ぶりが確認された。したがって、現状は金正日氏の指導體制を維持しつつ、次の指導者（リーダー）の準備を行っている過渡期的段階であると考えべきである。また、「強

盛大国の大門を開く」年とされる 2012 年に向けて朝鮮は、経済的な安定とともに、米国との平和協定の実現を目指している。それらが実現すれば、主体思想（金日成）、先軍政治（金正日）の次の段階である後継体制へ進むであろう。このような情勢の中で、朝鮮は核外交を展開しているが、日米韓は対朝鮮圧迫政策を続けており、「緊張の高め合いの悪循環」に陥っている。

最後に、東日本大震災と朝鮮をめぐる情勢から、核（核兵器、核エネルギー）のない東北アジアが軍事・政治と経済・社会の両面から展望された。具体的には、東北アジアの信頼醸成と軍縮、非核化を成し遂げるための手段として、日朝国交正常化、原子力に依存する大量消費社会の克服と親環境的なエネルギーの定着をめざすことである。とりわけ本講演の主題である日朝国交正常化については、植民地支配についての謝罪と歴史清算、在朝被爆者への対応や戦後補償についての取り組みの必要性などが強調された。

以上が講演の主な内容である。

文責：呉仁済